

留学生教育に向けた日本語詩歌に関する研究

Study of the Japanese Poetries for Foreign Students Education

プロジェクト代表者名：新井高子（国際交流センター・准教授）

Arai Takako (Center for International Exchange・Associate Professor)

1 概要

この研究は、留学生に日本の詩歌を教えるための授業研究である。留学生向けの教養教育科目「日本事情」で、日本の詩歌を教えるために、その授業展開を考える研究を行った。

他の言語の語学教育では、詩は、教育の非常に早い段階においてさえ取り上げられることがあるが、日本語教育、日本事情教育で、詩が採用されることは一般的にはごく稀であり、そのための教科書等もまだ出版されていない。

研究成果については、自主教材を作成したほか、報告等を執筆した。

2 留学生用教材のための日本語詩歌の選定

まず日本の近代詩、現代詩を中心に、短歌や俳句等を含めながら、資料収集と整理を行った上で、授業で取り上げる作品の選定を行った。

日本語能力がそれほど高くない留学生、日本語能力試験の1級レベルに満たない留学生も、埼玉大学の「日本事情」を受講している。よって、授業で取り上げる詩歌の選定に当たっては、文学史において価値ある作品であることに留意するだけでなく、語彙のレベルや文法レベルが、受講する学生にとって理解を超えるものではないことにも、十分な注意を払わなければならなかった。また、詩歌鑑賞に興味を持ってもらうことも授業の目的の一つなので、内容の点でも、留学生にとって、できるだけ親しみやすいものを選ぶ努力が必要であった。

なお、その作品を書いた詩人等に対する関心を引き出すために、その人生や主義主張、作風等をわかりやすく説明できるよう、評伝や詩論、エッセイ等の資料も収集した。

その結果、2007年度の「日本事情」では、萩原朔太郎、宮沢賢治、田村隆一、谷川俊太郎、白石かずこ、吉増剛造、藤井貞和、アーサー・ビナード、ボヤン・ヒシグ、田原の作品を取り上げるべく、選定に努めた。

なお、アーサー・ビナード、ボヤン・ヒシグ、田原は、成人してから留学生等となって来日し、日本の大学や専門学校で日本語を学んだ後に、日本語詩人となった書き手である。彼らは比較的若い世代の詩人だが、現在、日本語の詩に新風を吹き込んでいる。留学生にとっては、非常に親しみやすく、また自らの可能性を広げるきっかけともなるかもしれないと考えた。

3 視聴覚資料の収集

詩人等が自ら朗読した声には、その作品を理解するための入口ともなりうる魅力がある。さらに、日本語能力がそれほど高くない留学生に、日本の詩歌を教える場合、言葉だけでなく、映像や音声等によって訴えかけ、想像力を積極的に掻き立てることも重要だと考えた。

視聴覚資料として、詩人や歌人等の朗読CDやテープ、詩人と音楽家、舞踊家、写真家等のコラボレーションのCDやビデオ等を収集した。詩や詩人を扱った過去のテレビ番組も、可能な範囲で収集に努めた。

また、一篇の詩は、それだけが孤立して存在しているのではなく、その時代の、その他の芸術思潮などと深く結びついていることが多い。そこで、隣接分野の芸術作品も資料として有効だと考え、ダンス、演劇等の芸術に関しても、映像資料や戯曲等の収集を行った。

4 自主教材の作成

上記の詩人の作品や履歴等を掲載した自主教材を、プリント教材の形で作成した。

留学生の場合、作品を理解することにかかる時間がかかるため、詩の紹介は、それぞれの詩人について1～4篇程度とした。

5 授業展開の考案

上記の自主教材と、映像・音声資料等を組み合わせて、総合的な授業展開を考案した。

6 パネルディスカッションへの参加

上述したような、留学生教育向けの詩歌研究を行いながら、日本の詩歌について深めた知識を活かし、米国・ニューヨークで開催された『現代日本女性詩人の祭典』において、「日本の詩歌事情、最新事情」というテーマのパネルディスカッションの発表者の一人となり、発表や討議等を行った。留学生に日本語を教えている立場を活かし、日本語の特性と日本語の詩の特徴を結びつけた内容を話した。

また、この参加によって、アメリカの現代詩人の著作や朗読CD等についても、資料収集を行うことができた。

なお、参加の渡航費については、国際交流基金から助成を受けた。

・『現代日本女性詩人の祭典』於poets house（ニューヨーク）、2006年11月15～17日

7 著作

上記の自主教材の作成のほか、「現代日本女性詩人の祭典」への参加の後、祭典の内容とニューヨークの詩をめぐる状況について報告を書き、新聞に寄稿した。

・報告「詩は血液のように街巡る」『朝日新聞』文化面、2006年12月25日夕刊

なお、戯曲に対する批評も執筆した。

・批評「絵を、縫え！ ——唐十郎戯曲『紙芝居の絵の町で』を読む」『ミテ』95号、ミテの会発行、2007年3月